

氏名(本籍)	つね み き こ 常見美紀子(大阪府)
学位の種類	博士(デザイン学)
学位記番号	博乙第2208号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	桑沢洋子研究 ーデザイン教育の理念と活動ー

主査	筑波大学教授	博士(デザイン学)	西川 潔
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	五十殿 利治
副査	筑波大学教授		穂積 毅重
副査	東北工業大学教授	博士(学術)	庄子 晃子

論文の内容の要旨

前半は桑沢洋子の活動を追いながら、彼女の教育者やデザイナーとしての基本的な考え方、理念の形成過程に視点を据え、後半は教育を軸に置き、桑沢デザイン研究所設立にいたる経緯や、そこで行われた授業の実態を明らかにしている。全体を通して、桑沢の生活重視の合理主義と、構成教育の積極的なカリキュラム化に見るような、基礎教育重視の姿勢を明らかにし、わが国の近現代のデザイン教育における桑沢洋子の果たした役割を検証している。

本論文は5章によって構成されている。その概要は下記のとおりである。第1章〈桑沢洋子の自己形成期〉では、桑沢の幼年期から戦前までを概観している。桑沢は1927(昭和3)年女子美術学校洋画科卒業し、その1年後、川喜田煉七郎(1902-1975)主宰の「新建築工芸學院」に入学し、構成教育を学んだ。同じ頃から『住宅』の取材記者となり、建築を通して、近代デザイン思潮である機能主義・合理主義を学ぶ。また衣服における「日本的なもの」の探究も重要な彼女のテーマであった。それにはデザイナー伊東茂平との出会いが大きく影響している。伊東は感覚だけに依存しない科学的思考の持ち主であった。さらに、桑沢はグラフ誌『NIPPON』などに関わる当時の最高水準のデザイナー、作家等と交流して、のちの活動の基盤を築いて行く。

第2章〈桑沢洋子のデザイナー活動〉では、戦後に桑沢が行った仕事着、企業ユニフォームおよび既製服のデザイン活動を明らかにするとともに、その意味を考察した。敗戦直後から、桑沢は、野良着や仕事着の改良をとおして、女性の社会的地位の向上、経済的自立支援という啓蒙活動に取り組んだ。また、彼女は『婦人朝日』主催の「全国仕事着コンクール」や、「全国巡回婦人朝日 服装相談室」の指導者として全国を巡回した。同時に、初代の農林省生活改善課長であった山本松代に協力し、衣服による生活改善という視点から、『家の光』を中心に野良着の改良を提案し、農村婦人の啓蒙にも力を注いだ。桑沢のデザイナー活動の中では、機能性が要求される仕事着(ユニフォーム・野良着を含む)のデザインが最も大きな割合を占めていた。仕事着は各種のデザインサーベイが不可欠なため、桑沢は積極的にインダストリアルデザインの手法を取り入れてファッション・デザインを行ったことを明らかにしている。

第3章〈新建築工芸學院における構成教育〉ここでは桑沢のデザイン諸活動の出発点であり、デザイン教育の系譜として重要な「新建築工芸學院」の構成教育、および川喜田の構成概念について検証している。

川喜田の実践的で科学的な思考方法は、その後の桑沢のデザイン活動に多大な影響を与えた。戦後になり、桑沢は、新建築工芸學院の構成教育を「構成理論を一足飛びに服飾のデザインに結びつけようとすることに危険を感じた」と批判した。しかしながら、新建築工芸學院の構成教育は、日本のデザイン教育という視点からも、また、桑沢のデザイン諸活動のもとになったという面からも、重要な意味を持っていたことについて資料を多用して明らかにしている。

第4章 <桑沢デザイン研究所における構成教育>では、桑沢デザイン研究所の創立の契機、創立時の初期メンバーとカリキュラム編成や構成教育の内容などを明らかにするとともに、1950年代のデザイン運動における、研究所の位置づけを明らかにした。

1948年に桑沢は、多摩川洋裁学院の学院長に就任し、ファッション・デザイン教育を開始した。学院内にK・D技術研究会（1950年－1960年）を発足させ、流派を問わないファッション・デザイン教育活動を展開する。1954年、桑沢デザイン研究所を創立し、リビングデザイン科とドレス科を開設した。グロピウスの研究所訪問（1954年6月）、インスティテュート・オブ・デザイン出身の石元泰博の講師就任などによって、2年目から日本のニューバウハウスを標榜し、構成教育を基盤とするカリキュラムを編成する。

第5章 <ファッション・デザイン教育の形成>では、桑沢のファッションデザイン諸活動から改めてデザイン理念を確認し、構成を基盤としたファッション・デザイン教育の形成過程をドレス科のカリキュラムの変遷を辿りながら考察している。

その結果、桑沢のファッションデザインにおける理念の柱を次のような「近代デザイン思潮」「日本的なもの」「民芸でいう尋常美」「生活重視の思想」「近代デザインと民芸の融合」の5本にまとめられると結論付けている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は桑沢デザイン研究所を創立し、東京造形大学初代学長を勤めた桑沢洋子の教育活動およびその理念に関する研究である。著者の専門はファッションデザインであるが、ファッションデザイナーとしてのみ桑沢を見るのではなく、昭和の初期からデザインの前衛的活動に関わり、しだいに教育者、あるいはオーガナイザーとして社会的な活動を展開する桑沢洋子の理念と実像について、膨大な資料に当たりながら、また、関係者のヒアリング等をとおして明らかにした。先行研究の殆どない状態で、ここまでまとめあげた点は高く評価できる。また、その過程で触れられる新建築工芸學院やその主催者である川喜多煉七郎、服飾デザイナーの伊東茂平、デザイン理論の勝見勝、高橋正人、写真家の石元泰博、倉敷レイヨンの大原總一郎、染織家の柳悦孝など、さらに構成教育や造型教育センター創立、グッドデザイン運動への関わりなど、これまで個々に論じられてきた人物や運動が、桑沢洋子や桑沢デザイン研究所を一つの結節点として新しい角度から、光が当てられている点は、興味深く有意義なものとして評価できる。

一方、筆者は桑沢のファッションデザイン教育における「構成教育」にかなりの紙面を費やし、独自性や先見性、有効性を論じた。この点に関しては、必ずしも十分な成果を挙げたとは考えにくい。おそらく、第一線のデザイナーとして活躍する桑沢の応用デザインと、全くの基礎である構成教育との関係や、連繋に関する部分への調査と言及がやや足りなかったものと判断できる。しかし、これは今後の課題とすることで、本論文の成果は博士論文の水準に十分達しているものと思われる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。